令和7年度文化財巡回企画展

戦争とつくば



期　間　令和7年10月4日(土)～令和8年2月8日(日)

会期1　小田城跡歴史ひろば案内所
10月4日(土)～12月7日(日)
解説 11月2日(日)10:30から

会期2　谷田部郷土資料館
12月18日(木)～2月8日(日)
解説 1月24日(土)10:30から

お問合せ　つくば市教育局文化財課
〒305-8555 つくば市研究学園一丁目1番地1
☎ 029-883-1111(代表)
http://www.city.tsukuba.lg.jp
歴史・文化財



※つくば市域と関わる戦争について知っている方、戦争と関係する品々をお持ちの方は随時ご連絡をお願いします。

左上：谷田部海軍航空隊
昭和19年(1944年)9月27日　(個人蔵)
背景：西筑波陸軍飛行場　国土地理院地図・空中写真閲覧サービス(1947年米軍撮影)の画像を結合し加工

はじめに

長い歴史の中で、つくばは様々な戦争と関係してきました。戦争は、直接戦った人だけではなく、戦時下の社会を支えた人、戦禍に巻き込まれた人等、人々の生活に大きな影響をもたらしてきました。

日中戦争やアジア・太平洋戦争においては、つくば市域からも多くの人々が戦地へ赴き、銃後の暮らしも切迫したものとなりました。戦後80年が経った現在、徐々に失われつつある戦争の記憶や記録を、未来へ伝えていかなければなりません。

今回の企画展では、原始・古代から近代までの戦争とつくばの人々との関わりを、発掘出土品や古文書等の資料から紹介します。また、アジア・太平洋戦争下のつくばについて、市域に所在した旧日本軍の飛行場を主に、新出の写真資料等から振り返ります。

1 近代以前の戦争とつくば

① 原始・古代

●日本列島での戦争の始まり

日本列島で戦争が確認できるのは、弥生時代からです。弥生時代の関東地方以西では、濠に囲まれた防御的なムラや、青銅製の武器形祭器が出現します。また、弓矢の石鏃が大型化することが知られており、狩猟用ではない殺人のための武器になったためと考えられています。2世紀頃の中国の歴史書には、当時の日本列島が多くの小さなクニに分かれて互いに攻撃しあっていた「倭国大乱」の様子が書かれており、発掘調査でわかった状況とも合っています。さらに古い縄文時代以前にも人々の争いは起こったかもしれませんが、戦争のための武器や防御が認められない点で大きく異なります。

●つくば最古の武器

つくばを含む茨城県より北では、弥生時代の防御的な集落跡は見つかっておらず、明確な武器等の発見もわずかです。すでに戦争を経験した西日本とは異なる社会であったと考えられます。現在、つくば市内で確認できる最古の武器は、古墳時代前期、4世紀後半頃の水守2号墳から出土した鉄剣と鉄鏃で、ヤマト王権との関係でもたらされました。6世紀後半には小さな古墳でも鉄刀や鉄鏃の副葬が普通になり、武器が隅々のムラにまで普及したことが分かります。



鉄剣・鉄鏃 水守2号墳

●古代の防人、蝦夷征服とつくば

飛鳥時代から奈良時代にかけて、中国を手本に古代国家の体裁を整えていった日本は、北九州地方の防備や東北地方の蝦夷征服に兵力を注ぎました。北九州では、鉄等の資源や新しい技術を得るために軍事介入してきた朝鮮半島において、天智天皇2年(663)に唐・新羅連合軍との白村江の戦いで大敗し、大きな危機が生じました。その防御のため徴兵されたのが防人です。万葉集には筑波山のある故郷を懐かしむ防人の歌があり、つくば周辺の人々も加わったことが分かります。また、8世紀後半から本格化する蝦夷の征服では、東北地方に近いつくばを含む常陸国は、兵や物資の供給地になったと推測されます。この時期、徴兵は全国で作成された戸籍により行われるようになり、つくば周辺の人々も遠い地域での戦争と無関係ではいられなくなりました。

筑波嶺のさ百合の花の夜床にも
かなしけ妹そ昼もかなしけ
（巻二十　四三六九）
那珂郡の上丁　大舎人部千文

筑波山を読んだ防人の歌

② 中世

●中世前半の戦争

平安時代の10世紀前半、つくば市域を含む常総地域を主な舞台とした平将門の乱が起こりました。この頃から戦闘を職能とする武士が成立していきます。中世当初の武士は、乗馬して弓を射る弓射騎兵を中心に、それを補助する歩兵からなっていましたが、南北朝時代頃になると、槍の使用や弓射歩兵の増加などにより、戦闘方法も変化していきました。

暦応4年(1341)に、小田治久は南朝側の北畠親房を迎えて小田城に籠城し、包囲する

北朝側の高師冬との戦闘が行われました。しかし、戦闘は周辺での小規模なものに限られ、他の南朝側の城郭が落城すると、戦況が悪くなった治久は降伏して開城します。治久は、関・大宝城攻めに従軍するとともに、息子の孝朝は京都まで出陣することとなりました。



鉄鏃・鉄砲玉など 小田城跡

●戦闘が常態化した戦国時代

15世紀後半以降の戦国時代には、戦闘の激化に伴い中世前半に館や寺院、山等に臨時に設置された城郭が常設化され、常時戦闘に対応せざるを得ない状況となりました。つくば市域の中心勢力であった小田氏も、中小の勢力（結城氏・大掾氏など）との争いから、次第に大名間（北条氏・上杉氏など）の大規模な戦闘に巻き込まれていきます。16世紀後半には、鉄砲の伝来により、戦いは更に激しいものとなりました。

●小田城をめぐる攻防と戦国時代の実態

16世紀中頃の小田氏治の時に、小田城では落城と奪還が繰り返されました。この頃は、敵領地の田畑の作物を荒らすことや、村や町を焼き払うことが盛んに行われ、小田城の戦闘でも同様な行為が行われています。永禄7年（1564）の上杉謙信※・佐竹義昭との戦闘では、氏治は土浦城に撤退しましたが、小田方の討死・焼死・溺死者が千～2千人に及んだとされ、最も大きな被害となりました。永禄9年（1566）には、謙信へ降伏・開城しました。その前後は不明ですが、同年に小田で人身売買が行われました。これは、天候不良と戦争による飢饉に対応するため、飢え死にするよりは生きる道を選ぶという側面もありました。このように戦争では、戦闘員以外の一般の人々も巻き込まれていきました。

※改名するが「謙信」で統一。



刀傷のある頭骨 小田城跡 （K.Sakaue, 2020）
小田城の堀跡から、2か所に刀傷と思われる鋭利な外傷がある頭骨のみが出土しました。中年の女性とされています。

③近世・近代

●泰平の終わりと幕末の動乱

「天下泰平」と形容される江戸時代は、安定した時代が長く続きましたが、幕末に再び「戦いの時代」に向かっていきました。文久2年（1862）になると幕府で軍事改革が行われ（文久の改革）、「幕府陸軍」が創設されました。その歩兵の一部は各地の旗本領・幕府領から村々の石高に応じて「兵賦」として徴発され、旗本・幕府領の多いつくば市域も影響を受けました。幕末の動乱のなかで、農業を生業とする人々も、再び戦争と無縁では無くなったのです。また、元治元年（1864）には水戸藩の急進的な尊王攘夷派である天狗党が筑波山で挙兵する「天狗党の乱」が発生しました。筑波山麓の村々も、天狗党、幕府双方から人馬や金銭を求められるなど、その影響を受けました。市内には、争いで命を落とした天狗党員を供養する塚や碑が各所に残されています。



幕府への兵賦差し出しに伴う議定書
上郷土田家文書 慶応元年（1865）
幕府領の村々に村高千石につき1名の割り当てで、兵賦の差し出しを命じたものです。この史料は、今鹿島村、高須賀村、上郷村、上新田村（高良田）、手子生村の5村から8名が雇い出ることと、兵賦を勤めるにあたっての決め事を記しています。この徴発の背景には、第二次長州征討により江戸の警備が手薄になったことがありました。

●近代日本と対外戦争

戊辰戦争を経て政権を掌握した明治新政府は、富国強兵のスローガンのもとで軍備の近代化を進めていきました。士族反乱を抑えたのち、大陸への進出を志向した近代日本は、対外戦争への道を歩んでいくことになります。明治27年（1894）に、朝鮮王朝内の政治的混乱

と農民反乱に対する介入をめぐり、日本と清が衝突したのが日清戦争です。近代日本で初めての対外戦争となったこの戦争に勝利した日本は朝鮮を影響下に置き、大陸での権益を拡大していきました。一方、いわゆる三国干渉と朝鮮半島内でのロシアの影響力の上昇に伴い、日清戦争後の日露関係は急速に緊張が高まることとなりました。そして、明治37年(1904)には日露戦争が発生しました。茨城県民生部世話課編『茨城県終戦処理史』によると、つくば市域では日清戦争で18名、日露戦争で102名が亡くなっています。

●シベリア出兵と尼港事件

また、第一次世界大戦中に発生したロシア革命を受けて、日本は西欧諸国とともに居留民保護を名目としてシベリアに出兵する軍事介入を行いました。この際、大正9年(1920)にロシア極東のニコラエフスクで日本軍守備隊と居留民が革命勢力のパルチザンと衝突し、捕虜となった軍人・民間人が虐殺される「尼港事件」が発生しました。この戦闘により守備隊を構成していた水戸歩兵第二連隊第三大隊は全滅し、つくば市域の出身者も命を落としました。

2 近代以前の戦争とつくば

① 戦時下の県内

●アジア・太平洋戦争にいたるまで

昭和6年(1931)に中国の柳条湖で起きた線路爆破事件(柳条湖事件)を契機に、満州に駐留していた日本軍である関東軍は、中国軍へ軍事行動を開始し(満州事変)、昭和7年(1932)に傀儡政権の「満州国」を建国します。しかし、国際社会からは認められなかったため、日本は昭和8年(1933)国際連盟を脱退しました。これ以降、中国では反日運動が高まり、昭和12年(1937)7月に北京郊外の盧溝橋で日中両軍が衝突し(盧溝橋事件)日中戦争へ発展すると、昭和15年(1940)国家総動員法が制定されるなど、日本全体が戦争へと向かっていきます。日中戦争では、日本は中国の抵抗により苦戦したため、東南アジアへと進出する南進政策に舵を取ると、アメリカやイギリスと対立します。昭和16年(1941)、日本軍はマレー半島へ上陸し、ハワイの真珠湾にいたアメリカ太平洋艦隊を奇襲攻撃して、アジア・太平洋戦争が始まりました。

つくば市域の戦死者数(第一次世界大戦後)

(単位:人)

	満州事変	日中戦争	アジア・太平洋戦争	合計
筑波町	6	66	829	901
大穂町	2	20	355	377
豊里町	2	34	324	360
谷田部町	6	43	589	638
桜村	1	26	272	299
茎崎町	2	14	150	166

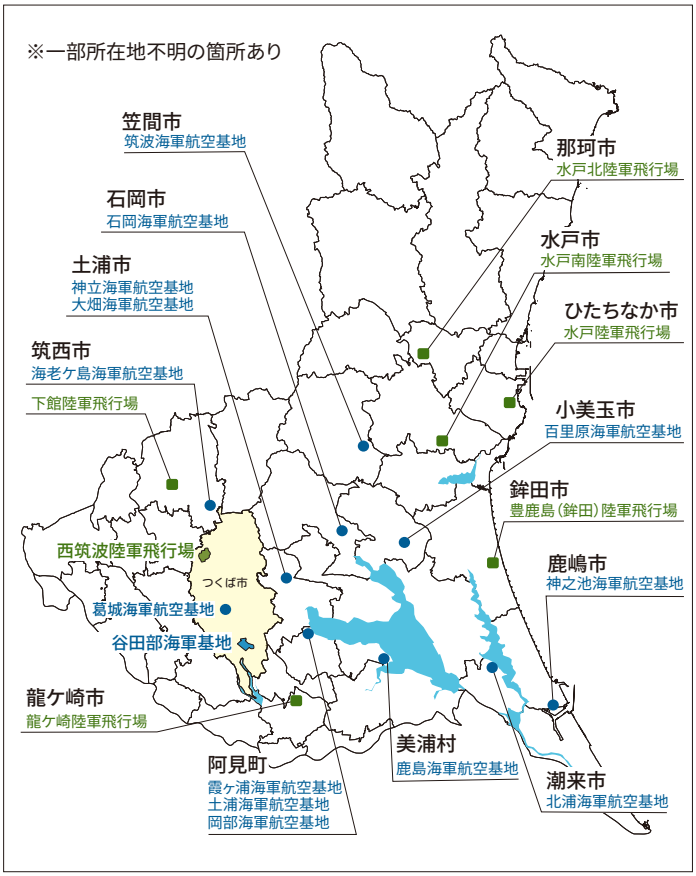
『茨城県戦後処理史』より抜粋して作成

●戦時下の生活

戦争が長期化し、戦況も悪化したことで、多くの男性が戦場へ送られ国内は労働力不足となりました。また、軍事費増のため税金が上がったり、物資不足のため日用品が配給制となったりと、国民の生活は苦しくなりました。残った人々は食糧増産と軍需生産に励みましたが、特につくば市域は農村であったため、働き手を失った農家の打撃は大きく、生産力は低下する一方でした。こうした働き手不足を補うため、中学生や女子学生までもが、近隣農家だけでなく北海道へも勤労動員されていきました。また、空襲が激しくなると、大都市からつくば市域へ疎開してきた人たちも多くいました。

●茨城県内の陸海軍施設

第一次世界大戦以降、戦争の在り方を変えるものとして飛行機が欠かせなくなると、大正11年(1922)、現在の阿見町に霞ヶ浦海軍航空隊が開隊し、その後は茨



アジア・太平洋戦争終結時点における茨城県内の陸海軍飛行場

伊藤純郎編「フィールドワーク茨城県の戦争遺跡」をもとに作成

城県内各地で陸海軍の施設が造られました。アジア・太平洋戦争の終結時点で、海軍航空隊は8か所、工事中の飛行場6か所の計14か所が、陸軍飛行場は6か所、秘匿飛行場1か所の計7か所があったとされています。そのうち、現在のつくば市内には、上横場・観音台を中心に谷田部海軍航空隊が、作谷・吉沼を中心に西筑波陸軍飛行場が設けられました。また、現在の市役所の南西側に葛城海軍航空基地が建設中でした。長さ800m×幅60mの飛行場があり、主に退避場としての使用が目的であったとされますが、詳細は不明です。

●空襲の被害

昭和20年(1945)3月10日の東京大空襲以降は、大都市だけでなく中小都市への空襲も激化しました。県内でも県北地域を中心に空襲の被害があり、多くの命が失われています。つくば市域では、『茨城県史』に小田でB29の本土侵入・退却時の投弾と考えられる爆撃があったと書かれていますが、詳細は不明です。また、谷田部海軍航空隊や西筑波陸軍飛行場へも、米艦載機による銃撃が数回あったと伝わっています。

② 谷田部海軍航空隊

●概要

飛行場としての開場には、昭和7年(1932)と昭和10年(1935)説があります。昭和9～10年(1934～35)にかけての飛行場用地や道路用地の買収・献納の文書から、建設場所の選定にあたり、谷田部の地が阿見や荒川沖に近いことが重視されていたことが分かります。

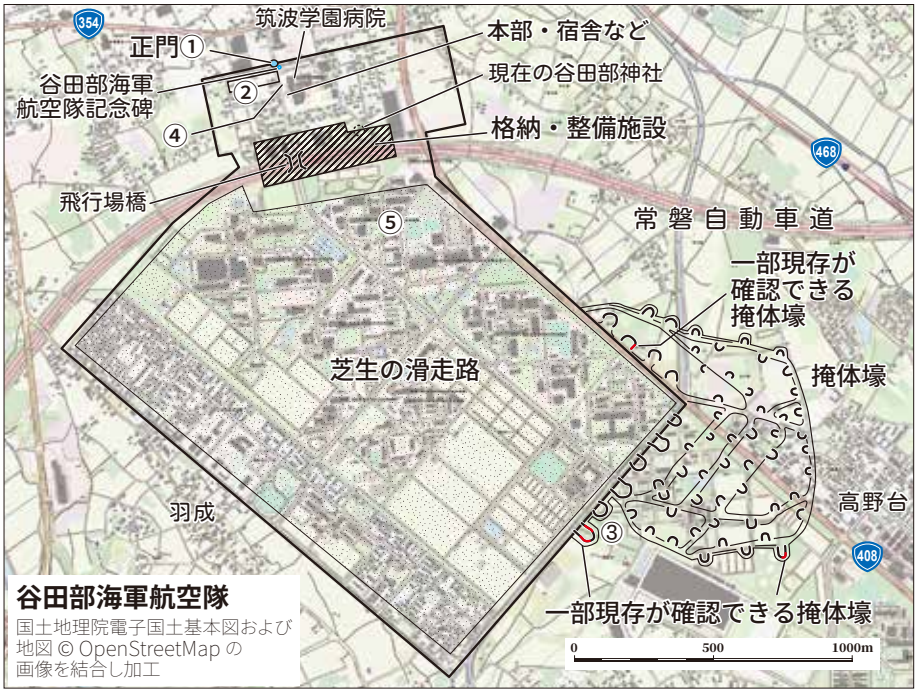
その後、昭和13年(1938)12月15日に霞ヶ浦海軍航空隊谷田部分遣隊が設置され、翌14年(1939)12月1日に谷田部海軍航空隊として独立します。



谷田部海軍航空隊の門柱 ①
昭和46年4月



谷田部海軍航空隊本部庁舎 ②
(『谷田部の歴史』より転載)



谷田部海軍航空隊
国土地理院電子国土基本図および地図 © OpenStreetMap の画像を結合し加工

●施設の配置

谷田部海軍航空隊は、現在の常磐道付近を境に、木造2階建ての本庁舎や倉庫などの建物のあった区画と、滑走路があった区画に分かれていました。現在は病院や住宅地、研究所となっていますが、現在の地割にも当時の区画の面影が残っています。滑走路部分は約1.8km×1.3kmで、舗装されていたのは格納庫前のエプロン(乗



農研機構内に一部現存する掩体壕 ③



桜並木 ④ (個人蔵) 現在の筑波学園病院とスーパーマーケットの間にある道と考えられます。



零式戦闘機と滑走路 ⑤ (個人蔵)
滑走路が芝生であることがわかります。

降や積み降ろしなどの作業を行う区域）のみで、それ以外は芝生でした。そのため、風の方向に関わらず、芝生のどの場所からでも飛ぶことができたようです。滑走路の南東には、敵襲から航空機を守る掩体壕が多く設置されていました。多くが屋根のない無蓋掩体壕でしたが、一部は有蓋掩体壕だったとされています。現在はそのほとんどが無くなってしまったものの、ごく一部が国道408号線沿い及び農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）の敷地内に残されています。

●「赤とんぼ」から「零戦」へ

昭和19年（1944）11月までは、この飛行場の役割は「赤とんぼ」と呼ばれる九三式中間練習機という飛行機での訓練でした。しかし、戦局悪化にともない、百里原海軍航空基地（現・小美玉市）から、秘匿性が高く滑走路の長い神之池海軍航空隊（現・鹿嶋市）へ、人間爆弾「桜花」を装備した神雷部隊が移ると、神之池海軍航空隊の実戦部隊が谷田部海軍航空隊へ移設され、谷田部海軍航空隊にいた中間練習機部隊は、神町基地（現・山形県東根市）へ移設となりました。その後、谷田部海軍航空隊では実用機教程が行われ、零式艦上戦闘機（零戦）などが、神之池から谷田部へとやってきました。



昭和19年9月27日谷田部航空隊（個人蔵） 背景に映っているのが「赤とんぼ」です。

●谷田部から飛び立った特攻隊

昭和20年（1945）2月10日に爆撃機B29が中島飛行機工場（現・群馬県太田市）を攻撃した際は、谷田部海軍航空隊からも迎撃に向かった1名が、2月16～17日に米艦載機が土浦・阿見方面を攻撃した際は、迎撃に向かった3名が亡くなっています。この戦闘状況を受け、2月17日に谷田部海軍航空隊も実用機訓練から特攻隊訓練に切り替え、特攻隊員を募ります。その中から選ばれた隊員で神風※特別攻撃隊「昭和隊」が編成され、鹿屋海軍航空基地（現・鹿児島県鹿屋市）へと転進していきました。昭和隊は第一次から第七次まで編成され、第一次昭和隊は4月7日に谷田部を飛び立ったとされています。隊員は54名おり、そのうち40名が亡くなりました。

※「しんぷう」と読むこともあります。

終戦の時点で、谷田部海軍航空隊には104の零戦があったとされています。昭和20年10月、米軍へ引き渡す際に横須賀へ飛び立ったのが最後の飛行でした。



昭和隊出撃の日（昭和20年4月7日）（個人蔵）



乾杯（昭和20年4月7日）（個人蔵）



西筑波陸軍飛行場

国土地理院電子国土基本図および地図 © OpenStreetMap の画像を結合し加工

③ 西筑波陸軍飛行場

●概要

昭和14年（1939）、地元の勤労奉仕による工事が始まり、翌15年7

月に陸軍航空士官学校西筑波文教所として開設します。約300haの敷地は当時の作岡村・吉沼村にまたがっており、北側に指令室などの建物があり、現在の作岡保育所付近に鉄骨造格納庫が３棟、木造格納庫が６棟ありました。また、谷田部海軍航空隊と違い、コンクリートで舗装された滑走路がありました。士官学校として利用されたのは約２年程度で、その後は落下傘や滑空機（グライダー）を用いて敵地前方へ進む挺身部隊の訓練地となりました。昭和17年（1942）にオランダ領インドネシアへ投下されたパレンバン落下傘部隊も訓練したといわれていますが、実際は訓練した事実は確認されておらず、翌年以降に設置された滑空機操縦者を育成する滑空班との混同があると推測されます。その後、滑空班は再編成・改称を経て、昭和18年（1943）11月に東部第一一六部隊（滑空歩兵部隊）・第一一七部隊（滑空機操縦部隊）というグライダー部隊となり、地元からも兵士が多数雇用されました。また、吉沼には高射砲陣地が構築されましたが、実弾が発射されたのは一度のみでした。

●周辺遺跡の発掘調査成果

・明石遺跡

西筑波陸軍飛行場より北東約1.5kmの明石遺跡では、古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落跡などが多く確認されていますが、長辺12.0ｍ以上、短辺9.0ｍ以上の比較的大型な近代の遺構が確認されています。あわせて鉄製缶と不明鉄製品が出土しており、戦時中に軍事物資を格納していた格納壕である可能性が指摘されています。

・薄久保遺跡

西筑波陸軍飛行場より北西約1.5kmの薄久保遺跡（下妻市高道祖）では、近代の溝状の遺構が確認されました。高道祖地区はつくば市寺具地区と隣接しており、戦後の空中写真からは、寺具から高道祖にかけて複数の予備滑走路や誘導路があったとされているほか、地域にはかつて掩体壕が存在した話も伝わっています。この遺構は誘導路沿いに造られており、底面に残る痕から、小型機を一時退避・格納した掩体壕の一部と考えられています。

●『筑波日記』から見る兵士の生活

谷田部海軍航空隊や西筑波陸軍飛行場では、兵士たちと地域の人々との親交などを示す話が伝わっています。中でも、三重県出身の詩人である竹内浩三（1921年～1945年）が昭和19年（1944）１月１日から７月27日まで毎日書き続けた『筑波日記』には、小田城跡で訓練をしていたり、作岡で掩体壕を掘ったり等、軍隊生活を語るもの以外にも、吉沼へたびたび出かけて外食を楽しんだり、銭湯や書店へ足繁く通ったりと、つくば市域に関する記述を残しています。吉沼以外にも北条や、宗道（下妻市）、石下（常総市）などつくば市域外へ出かけていた記述も多く、当時の兵士の生活についてよく分かる資料となっています。

また、中菅間の個人宅には、西筑波陸軍飛行場で使われていたと伝わる灰皿が残っており、兵士たちと地域住民の交流の様子が窺えます。



西筑波陸軍飛行場の灰皿
（個人蔵）

④ つくば市内に残る戦争の痕跡

かつて高山中学校南側から400ｍのほどの所に、昭和17年（1942）６月５日、谷田部海軍航空隊での編成飛行訓練中に事故で墜落した２名を弔った供養塔がありました。区画整理事業に伴い、令和２年（2020）に島名小学校へ移転されています。

また、昭和20年（1945）４月12日、西筑波陸軍飛行場を飛び立った飛行機が、離陸直後に大砂にて墜落・炎上しています。目撃者によると「炎と飛び散る破片で近寄ることができなかった」ようで、12名が亡くなっています。

上郷院内山遺跡では、統制陶器が見つかっています。統制陶器とは、昭和16年（1941）から昭和20年にかけて、物資不足などの状況下で生産された陶磁器で、生産者などを表す統制番号が標示され、数量などを管理していました。この統制陶器には軍歌「愛国行進曲」の歌詞が書かれています。戦時中の生活を伝える資料です。





底面

統制陶器　上郷院内山遺跡

⑤ ２か所の飛行場のその後

アジア・太平洋戦争の終結後、西筑波陸軍飛行場は、長野県からの開拓団により開拓され、芝の一大生産地となりました。現在の作岡保育所に西筑波陸軍飛行場の碑が残っているほか、滑走路のあった場所は直線道路となり、当時の姿を現在にも伝えています。

谷田部海軍航空隊は、病院や住宅地となり、また芝生の滑走路であった場所は研究所となりました。戦後もしばらく所在していた門柱のうちの一方は、住職が昭和隊の隊員であった御縁から、新潟県十日町市の圓通寺へ移設され、現在も大切にされています。



慰霊像「雲意鶴情」と谷田部海軍航空隊の門柱
新潟県　圓通寺　慰霊像は昭和54年（1979）に建立され、門柱は昭和57年（1982）に移設されました。「谷田部海軍航空隊」の看板は令和7年（2025）に新調されたものです。

おわりに

長い歴史の中、戦争は様々な目的で繰り返されてきました。そして、多くの被害者をもたらしてきました。アジア・太平洋戦争で大きな空襲を受けなかったつくばが、戦争について大きく取り上げられる機会は多くありませんでしたが、戦争と無関係でいられたわけではなく、戦争の痕跡は身近なところにも残されています。今回の展示が、戦争の悲惨さと平和の大切さについて考える契機となれば幸いです。

凡例　・このパンフレットは、令和7年度文化財巡回企画展「戦争とつくば」の展示内容を解説するものです。
・写真や遺物の所蔵者・提供者を表記しており、表記のないものはつくば市教育委員会の所蔵です。
・紹介した遺跡・文化財等には、立入が制限されていたり、見学に許可が必要なものがありますので御注意ください。

参考文献

・茨城県民生部世話課編 1972 『茨城県終戦処理史』
・桜村教育委員会編 1983 『桜村史下巻』
・茨城県教育委員会編 1984 『茨城県史　近現代編』
・小林察編 1984 『竹内浩三全集2 筑波日記』新評論
・水戸歩兵第二聯隊史刊行会編 1988 『水戸歩兵第二聯隊史』
・大穂町史編纂委員会編 1989 『大穂町史』
・筑波町史編纂専門委員会編 1990 『筑波町史下巻』
・神栖町歴史民俗資料館 1995 『神之池海軍航空隊　～戦後50年・神雷部隊の人々～』
・藤木久志 1995 『雑兵たちの戦場　中世の傭兵と奴隷狩り』朝日新聞社
・牛久市史編纂委員会編 2002 『牛久市史 中世編Ⅰ－古文書編－』
・渡辺洋二 2003 「谷田部の空は零戦の空」『航空ファン』2003年1・2月号 文林堂
・牛久市史編纂委員会編 2004 『牛久市史 原始古代中世』
・佐藤孝一 2004 『歌集　雲の彼方に』第9版
・近藤好和 2005 『歴史文化ライブラリー184　騎兵と歩兵の中世史』吉川弘文館
・茨城県立つくば工科高校放送委員会 2007 “谷田部海軍航空隊の記録”（DVD）
・伊藤純郎編 2008 『フィールドワーク　茨城県の戦争遺跡』平和文化
・つくば市教育委員会 2011 『つくば市史 史料集 第八編 村の年代記』
・つくば市教育委員会 2012 『史跡小田城跡－第59・62次調査（遺構保全ゾーンⅠ）報告－』
・吉田一也 2013 『海軍生活の回想』
・呉座勇一 2014 『戦争の日本中世史 「下克上」は本当にあったのか』新潮社
・伊藤純郎 2019 『特攻隊の〈故郷〉霞ヶ浦・筑波山・北浦・鹿島灘』吉川弘文館
・(有)毛野考古学研究所ほか 2020 『薄久保遺跡　下妻市埋蔵文化財調査報告書第18集』
・井坂敦実 2021 『万葉集の筑波山』 結エディット
・Kazuhiro Sakaue, 2020, Three cases of crania with sharp-force traumas excavated at the Japanese castle sites, Bulletin of the National Museum of Nature and Science. Series D, Anthropology

謝辞：展示の開催及びパンフレット作成にあたり、以下の方々の御指導・御協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。
（50音順、敬称略）
青木克裕　伊藤純郎　大水豊司　久保田いずみ　久保田富次郎　坂上和弘
中根正明　根﨑孝志　廣瀬修二　渡辺仁　渡邊真人
圓通寺　公益財団法人茨城県教育財団　国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構

発行：つくば市教育委員会（茨城県つくば市研究学園一丁目1番地1）　印刷：株式会社イセブ　発行年月日：令和7年（2025年）10月4日